〔科目名〕	〔単位数〕	〔科目区分〕
経営特殊講義Ⅱ（会計史）	2 単位	専門科目 展開科目

〔担当者〕	〔オフィス・アワー〕	〔授業の方法〕
山下修平	**時間：**授業開始前後のほか、メール対応 **場所：**講義室など	講義

〔科目の概要〕

本講義は、会計の歴史の概要を理解することを目的とします。具体的には、会計の起源や複式簿記の誕生から始めて、ヨーロッパにおける複式簿記の伝播や、株式会社会計の起源と発展等を扱い、現代における会計のグローバル化までを解説します。また、後半の 6 回程度を割いて、日本における会計史を解説します。

時代の変化とともに、誰かに「説明する」行為や、「記録と管理」の内容は変遷しています。会計を取り巻く環境の変化により、会計は発展してきました。本講義では、会計が誰に、何を求められてきたかを考察します。歴史を学ぶことにより、現在の事象や、今後の世界情勢の変化への対応に応用していただきたいと願っています。

現代の会計トピックに関連させながら、講義を進める予定です。現代の会計に関する諸問題を理解するためにも、会計の歴史を一緒にひも解いていきましょう。

〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕

＜他の科目との関連付け＞

会計に関する科目：「会計学基礎論」「財務会計論」「管理会計論」「監査論」など。

会計史は、会計の歴史ではありますが、その背景にある経済事象の歴史、企業の歴史、経営の歴史にも強く関連します。幅広く視野を持ちながら学んで欲しいと思います。

＜学ぶ必要性と意義＞

会計史研究は、文字通り、会計研究と歴史研究の境界に位置する学問です。歴史を学ぶ意義を説明することは容易ではありませんが、実験室での完全再現が不可能な社会科学では、歴史に学び、現状を分析し、未来を予測することは大切な作業です。本講義では、会計を対象として歴史を学び、現在の会計の問題を見つめたいと思います。

おそらく、会計史を学ぶことが、すぐに会計実務に生かされることや、就職活動を有利に進めること、お金を稼ぐことに結びつくことはありません（残念ながら）。しかし、経営経済学部に在籍する学生の「教養」として学んでほしいと願っています。

〔科目の到達目標〕

会計の歴史の概要を理解することを目標とします。会計がどのように発達してきたのかを歴史的に学ぶことにより、現代の会計がどのように成立したのかを理解します。加えて、現代の会計に係る諸問題をより深く理解できる能力を獲得することを目標とします。

〔ディプロマ・ポリシー（DP）との関係〕

学部				学科		
DP1	DP2	DP3	DP4	DP1	DP2	DP3
○	○			○		

〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕

これまでの授業において、「会計」「簿記」に苦手意識を持つ受講生が多くいました。そのため、「簿記を苦手にしている学生にとってわかりやすい講義」を心がけてきました。必要な会計の知識は、復習をしながら講義を進めています。この点はおおむね好評でしたので、今年度も同じ方針で臨みます。会計や簿記に苦手意識を持つ学生の受講も歓迎します。板書のスピードやレジュメ配布の頻度など、授業の進行方法についてさまざまなご意見を頂いています。履修者の皆さんの声に耳を傾けながら、バランスよく講義を進めたいと思います。

〔教科書〕

教科書は指定しません。教員が作成したスライドやプリント(レジュメ)、板書を用いて講義を行います。

〔指定図書〕

野口昌良・清水泰洋・中村恒彦・本間正人・北浦貴士編『会計のヒストリー80』中央経済社、2020 年。

〔参考書〕

千葉準一・中野常男編著『会計と会計学の歴史(体系現代会計学第 8 巻)』中央経済社、2012 年。

渡邉泉著『会計の歴史探訪―過去から未来へのメッセージ―』同文舘出版、2014 年。

遠藤博志・小宮山賢・逆瀬重郎・多賀谷充・橋本尚編著『戦後企業会計史』中央経済社、2015 年。

友岡賛著『日本会計史』慶應義塾大学出版会、2018 年。

上野清貴編著『日本簿記学説の歴史探訪』創成社、2019 年。

中野常男・清水泰洋編著『近代会計史入門 第 2 版』同文舘出版、2019 年。

このほか、講義中に適宜紹介します。

〔前提科目〕

特にありません。ただし、「会計学基礎論」「財務会計論」「管理会計論」「監査論」などの会計学に関する科目を履修していると、より理解が深まると思います。

〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)

期末試験を行います。講義毎に課題(小テスト・小レポート・リアクションペーパー等)を課します。

＜点数の配分＞

期末試験(まとめの試験) ： 40 点(40%)　　講義毎の課題 ： 4 点×15 回 = 60 点(60%)

〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕

・会計や簿記を得意とする学生だけでなく、苦手としている学生の受講を歓迎します。

・前提となる会計学や簿記の知識に触れながら講義を進めますが、復習しておくと望ましいです。

・該当する時期の世界史や日本史を復習しておくと望ましいです。

・受講者の積極的な発言(質問・意見)を期待します。

・現代における会計の諸問題と結びつけながら、講義に臨んでください。

〔実務経歴〕

該当なし。

授業スケジュール

第 1 回	テーマ(何を学ぶか)： 会計史とは 内　容： 講義全体の概要を説明します。会計史を学ぶ意義について考えます。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 2 回	テーマ(何を学ぶか)：会計の起源と複式簿記 内　容：古代における会計の起源と、イタリアで誕生した複式簿記について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 3 回	テーマ(何を学ぶか)：ヨーロッパにおける複式簿記の伝播 内　容：ヨーロッパ(イタリア～オランダ～イギリス)において伝播した複式簿記の歴史的背景を解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 4 回	テーマ(何を学ぶか)：株式会社の誕生と会計 内　容：株式会社の誕生が会計の発展に与えた影響について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。

第 5 回	テーマ(何を学ぶか):固定資産会計の生成 内　容:固定資産会計、とくに減価償却の考え方や、その生成と発展について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 6 回	テーマ(何を学ぶか):財務諸表の生成と発展 内　容:貸借対照表や損益計算書などの財務諸表の生成と発展について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 7 回	テーマ(何を学ぶか):管理会計の生成と発展 内　容:工業化に伴って生成・発展した管理会計について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 8 回	テーマ(何を学ぶか):職業会計人の誕生と監査 内　容:イギリスにおいて誕生した職業会計人と監査業務の変遷について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 9 回	テーマ(何を学ぶか):日本会計史　日本の伝統簿記、西洋簿記の導入 内　容:江戸時代における日本の伝統簿記を紹介し、明治維新後の西洋簿記の導入を解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 10 回	テーマ(何を学ぶか):日本会計史　明治時代～昭和初期 内　容:西洋簿記の伝播、減価償却の導入、商法制定の影響、戦前の監査、職業会計人の誕生について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 11 回	テーマ(何を学ぶか):日本会計史　戦時期 内　容:統制経済期における会社経理統制の展開について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 12 回	テーマ(何を学ぶか):日本会計史　戦後日本の企業会計体制 内　容:証券取引法の制定、公認会計士による監査制度の導入、企業会計原則の制定などについて解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 13 回	テーマ(何を学ぶか):日本会計史　公認会計士法と監査法人制度の変遷 内　容:戦後日本における公認会計士法と監査法人制度の変遷について解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 14 回	テーマ(何を学ぶか):粉飾決算事件の事例と、その対応の歴史 内　容:世界と日本における粉飾決算事件の事例を紹介し、その対応の歴史を解説します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
第 15 回	テーマ(何を学ぶか):会計ビッグバン、会計のグローバル化、そして今後の展望 内　容:会計ビッグバンの時代背景と会計制度の特徴について解説します。また国際会計基準の整備と、世界各国や日本の動向を解説します。そして今後の展望を検討します。 教科書は使用しません。指定図書は別記。スライド・プリント・板書を用いて講義を行います。
試　験	期末試験(まとめの試験)を実施します。 講義で配布したプリントおよび自筆のノートの持ち込みを可とします。